

# 平成30年度 百合便り

校長だより 5月号

新緑から、そろそろ夏の気配に移り始めました。前期中間試験も終わり、本格的に新学年としての自覚と行動に目覚める時期です。

さて、今年度から55分授業となり、授業準備や形態の変化に職員も苦勞している様子がうかがえます。授業時に廊下を見回してみると、生徒たちは以前と変わらぬ姿勢で授業に臨んでいます。授業時間をきちんと確保していくことで必然的に学習時間が増え、気づかないうちに生徒の知識・技能は深まります。そして、今年度は効果的な5分延長を模索し、「目標提示と振り返り」「課題、演習の推奨」「進路指導のある授業」など教科指導目標を打ち立て、授業研究に取り組んでいます。

今回は教育の変遷について少しお話ししようと思います。学校現場は「生徒と先生」という人的資質は変わらなくとも、「指導要領」による、教科指導の方向性によって育つ生徒は大きく変わります。小学校教育において昭和55年から平成13年まで続いたいわゆる「ゆとり教育」も様々な意見がありますが、家庭教育が見直され、画一的な価値観の教育から個が解放され、校内暴力の激減や個性伸長で才能を発揮した生徒も多くいます。まさに羽生結弦さんや大谷翔平さんはこの時代です。けれど教育に100点満点の正解はなく、いつの時代も足りないものを補いながら変革を重ね、それがいつしかスパイラルになり「時代が繰り返される」現象になるのだと、長い経験を重ね、ようやく私自身も実感できるようになりました。

教育現場では平成34年からまた、「新指導要領」が始まります。基礎・基本の知識・技能の充実にさらにより戻しをかけながら、それを活用する「思考力・判断力・表現力」が大きな柱です。昭和55年と現代では、なるほど、考える土壌が全く違います。「コンピューターを作っていた時代」から、「コンピューターにさせることを考える時代」です。果てしない想像力と思考力が必要になるのは間違いないでしょう。

新しい教育のもと、新しい時代を生きていく生徒を見守ることが最近では楽しみです。なにやらたくさん孫を持つようなそんな気持ちになるのは私の中の大きな変遷です。